

「風力発電問題研究会」 S

風力発電に関する報道姿勢の問題について

貴紙4月1日付けの朝刊から計4回にわたって連載されたシリーズ「エコ・ウォーズ」―新エネの壁―と題する自然エネルギー導入に関する記事を拝見し、その報道姿勢に幾多の疑問を感じさせられております。そこで40年以上にわたる貴紙の購読者のひとりとして記事について多少の苦言を呈し、いくつかの問題点をお伝えさせていただきます。

私見をもって要約していえば、記事は、自然エネルギーのなかでもほぼ風力発電に特化する形で、欧米との比較において風力による発電導入量の遅れを指摘し、障壁として立ちはだかる送電線連系の問題点や RPS 法による導入促進の限界を指摘しつつ、風力においても電力の固定価格買い取り制度 (FIT) を採り入れることで大幅に利用拡大を促す必要がある、とするものでした。また、国内における風力発電導入拡大の遅れによって、未曾有の不況下にあつて「グリーン・ニューディール」によるエコ産業の成長・発展が損なわれ、風力発電機製作など高い技術力をもつ日本のエコ産業が世界へ進出し市場を獲得する機会が失われる、というものでした。そして、国内における風力発電の導入拡大のためには、現在は地域ごとに電気事業者と一体化している送電線網を切り離して新エネによる発電事業者が自由に接続できるように独立させ、他方で固定価格買い取り制度 (FIT) を導入することが、地球温暖化防止の「本気度」として、いま政治に求められている、とするものでした。つまり電力供給の地域独占体制をゆるめて、風力発電事業者等が自由に参入できる供給制度への移行と、固定価格買い取り制度によって「儲かる事業」として風力発電事業への参入を促す体制を構築することの必要性が政治に期待されている、とする記事内容に思われました。

拝見してあまりにも風力発電事業者に肩入れをする記事であることに驚きました。これではまるで業界紙のようではないですか。朝日新聞はいつから業界ジャーナリズムに成り下がったのでしょうか。風車による健康被害など風力発電の問題点などほとんど採りあげられていません。風力に対して距離を置いてみる中立的、客観的な目は皆無といえます。というより記事では、自然エネルギーのなかでも風力が特別視され、風力発電導入拡大一辺倒という印象がぬぐえませんでした。取材先も業界と推進派の NGO などの関係団体に限られているようです。一般紙に求められる業界と距離をもつ報道姿勢の客観性と中立性、記事の公正さに欠けるといわざるをえません。日本のオピニオンリー

ダーたる朝日新聞の社会的役割の大きさからして、記事は、業界紙とは違って、国の政策と民意を誘導するものとして機能するでしょう。だからこそ貴紙においては、客観的、中立的な配慮のもとに問題点を整理して取材し、必要がある場合には検証して記事にさせていただきたいという強い思いがあります。解決が求められている風力発電にまつわる諸問題は多々あるのです。

貴紙には、この1月に2度、風力発電による風車近隣住民の健康被害の問題と補助金交付認定にかかわる環境影響調査および建設予定地周辺住民への事業説明の問題が大きな記事として掲載されました。それまで大手新聞では採りあげられたことがない風力発電の負の側面を報じた記事として、「さすが朝日新聞」という声があちこちから聞こえてきました。この記事は風力発電がかかえる問題点のいくつかを社会的に露呈させてくれました。風力を否定するのではなく、その導入に伴うマイナスの側面を採りあげて、問題解消のためには法的に位置づけられた環境影響調査の必要性を訴えている点で高く評価できる記事でした。

同様のことの一部は「エコ・ウォーズ」でも初回記事で「風車をめぐっては、景観の問題、鳥が羽根にあたるバードストライク、風車の回転による低周波音が与えるとされる人体への影響などが取りざたされている」と一言触れられています。また、最終回では、「気象条件、洋上への設置、環境アセスメント、景観、鳥の衝突、騒音・低周波音」が課題として一覧表にして掲載されています。しかし、それで終わりです。本文ではなんの言及もありません。風力推進拡大のみとっていいでしょう。そこに申し訳程度に「取りざたされている。」では報道したことにならないでしょう。これらの問題点について、掘り下げて考え、問題を解決していく方向性を示すことなくして風力発電の導入拡大などありえないのではないのでしょうか。

そもそも風力発電は、その土地の気候、地形、景観、自然生態系など風土を考慮して導入されるべきものです。風が吹くから適地では困ります。そこには代々にわたって人々が住み、自然やその移ろいとけこんでいる人たちのささやかな暮らしがある。豊かで多様な動植物層が存在し、美しい景色が広がっている。また、土地に根づいた暮らしのなかには伝統も息づいている。風土とはそうした土地や自然、気候や季節の変化にともなう人々の暮らしの様態であるから余計に、周辺環境を一変させる風力発電の導入建設には慎重であることが求められるのではないのでしょうか。

というのは特に、風力発電は低周波・超低周波騒音を発生し、施設周辺住民の健康に多大な影響を与えるからです。とりわけ発電効率を追求する近年においては、風力発電機の大規模化、出力の増大と施設の集中化によって各国、日本各地で健康被害を増大させています。この問題を無視することは許されません。被害に苦しんでいる人たちは生活破壊にまで追い込まれています。CO₂削減が喫緊の課題だとしても、人の健康や生活を損

なってもかまわないということにはならないでしょう。しかし風力発電業界と風車推進を唱える人たちは、この問題を無視してかかろうとしています。この点に関しては強く訴えていかざるをえません。健康被害については詳しい資料を添付しておきます。ぜひお読みになったくださることをお願いいたします。

景観破壊の問題も深刻です。景勝地として全国に知られ、海と山の美しい風景と温泉により観光を主たる産業として生きている伊豆半島南部の市町には、既設、工事中、計画進行中を含めて80基もの大型風車が建設されます。さらに水面下で進められている建設計画も数多くあると聞いています。すべてが狭い半島の山岳部に建設されるため、海からも丸見え、山なみ景観の破壊は決定的です。伊豆は風車半島と化し、景観が破壊されることで観光産業は大きな打撃をこうむることは避けられないでしょう。漁業、農業への影響もまぬがれないと思われまます。

風力発電はまた、施設周辺の自然生態系への影響も必至です。バードストライクのみならず、周辺地域ではハビタット（生息環境）破壊が進んでいます。野生動物への影響は避けられません。カナダでは、風力発電施設周辺で無数（数百）のコウモリの死骸が発見され、カルガリー大学の研究者13名のチームが188体を回収して調査したところ、すべてのコウモリの死因はブレードの回転が発生させる急激な気圧の変動による肺血管の破裂であることが判明した、と昨年8月に発表されています。

いま風力発電の進出により、こうしたことが全国各地で大きな問題になっています。風力発電業界は、風況がよければ所かまわず建設を求めて進出しようとし、国立公園内での建設規制緩和や保安林の解除などを求めてきています。こうした状況が進めば、いたるところで人々は健康被害に苦しみ、国土は荒廃にいたるでしょう。

風力発電産業について必要なのは、健康被害者の救済や被害を出さないための対策、環境影響調査の法的位置づけなどの法整備にもとづく一部規制です。そのもとで秩序ある施設建設により自然エネルギーとしての風力発電の利用拡大が図られなければならないと考えます。緊急を要する課題である地球温暖化防止、CO₂排出削減のためという理由によってはあっても、やみくもに風力発電の導入拡大は許されるべきではありません。これらについては国会でも採りあげていただき、問題にしてもらっています。資料を添付いたします。

以上のことをお伝えした上で、さらに加えるなら、「風力発電は（太陽光もですが）CO₂の削減に役立っていない」という報告もあります。貴紙においても1月21付け朝刊の「私の視点」に独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構エコノミストの石井彰氏の文章が掲載され、「例えばドイツは現在00年比で15%以上排出削減しているが、最大の要因は天然ガスによる石炭の代替であり、太陽光や風力ではなかった。」と述べ

られています。同じようなことについてフランスの民間団体 FEDでも「発電部門における風力のCO₂排出削減量は、ドイツでは2%増、スペインでは10%増になっている。デンマークでも同様の傾向にある。」との報告をしています。(NEDO 海外情報) 常時バックアップ体制によって電力の安定化を図り、需要に対して不足状態に陥らないように過剰供給状態に保っておかなければ、風力、太陽光発電は使い物にならないからです。特に風まかせの風力発電は、いつ、どの程度発電するか、まったく予測がつかず、石炭火力などによる発電状態でのスタンバイが欠かせないのはご承知のことでしょう。つまり不安定きわまりない風力発電導入によってかえって、既存の発電設備を空焚きして過剰供給状態を強めておく必要があるわけです。まして電力需要の多い日中や夏場は発電量が落ちるのが風力です。そのような風力にどのような利点があるというのでしょうか。CO₂削減効果についても検証の必要性を感じさせられます。バックアップに関しては、資源エネルギー庁は、風力による電力年間発電実績を公表することはありません。施設容量にもとづく推計値のみです。不都合があるからではないのでしょうか。

再度「エコ・ウォーズ」に戻っていえば、設定テーマもどうかと思わせるものです。いわんとすることはわかります。しかし、どうして自然エネルギー利用促進の拡大を「ウォー」という言葉で伝えなければならないのでしょうか。「ウォー」はアンチ・エコの極限ではないのでしょうか。それとも戦争をおっぱじめようともいうのでしょうか。すでに始まっている自然エネルギー関連産業の世界規模での市場争奪競争を「エコ・ウォーズ」と表現されては、そう考えたくもなります。先の戦争が資源の争奪から始まったことは誰もが知っていることであり、貴紙は、かつて国策に協力して戦争体制を翼賛し、その遂行を賛歌したことを反省したはずです。こんどは「エコ戦争」ということでしょうか。この言葉に編集委員の竹内記者に潜在する意識が垣間見えるように思えます。

3月21日に発刊された「週刊東洋経済」特大号には「新エネルギーバブル」という特集が組まれていました。全体として貴紙の記事とほぼ同方向の内容ですが、社のスタンスは、じつに堅実で内容も多面におよびます。欧米との導入量の単純な比較競争などによってではなく、それぞれの自然エネルギーがもつ可能性を探り、それらを紹介する記事でした。もちろん送電線の問題は重視されています。しかし、スマートグリッド導入という観点からです。固定価格買い取り制度についても導入すればいいというのではなく、欧州における失敗例をふまえて精緻な制度設計の必要性を求めています。また、風力、太陽光による電力の不安定性の問題にも触れ、それを解消する技術として日本の蓄電池技術を高く評価しています。それぞれの分野の専門家が筆をとっていますので、貴紙の記事と同一レベルで論じることはできませんが、総じて「週刊東洋経済」は多面的、客観的、冷静に自然エネルギーの問題を扱っているように思えます。「ウォー」などというおどろおどろしい言葉など一切使われていません。

以上、お伝えした問題点などもきちんと捉えた上で、風力発電の現状報告や将来予想を報道するのが、日本のオピニオンリーダーたる貴紙の役割であると考えます。やみくもな風力発電導入拡大礼賛に陥っている「エコ・ウォーズ」の記事は、貴紙に求められている社会的役割から大きく逸脱している、と思います。そのような記事は業界紙に任せておけばいいのではないのでしょうか。

貴紙においては、風力発電に関しては、以上のことを十分に検討、吟味、検証して偏りのない記事掲載に努めてくださることを願うものです。貴紙の紙面は4月から一変され、オピニオン面などが拡充されています。この問題については、そうした紙面で賛否を明らかにする両論を掲載して論議するなどの必要があるのかもしれませんが。いずれにせよ貴紙に期待するものが大きいがゆえに、今回の「エコ・ウォーズ」のような業界紙と見まがう報道姿勢にもとづく記事については、公平にして客観的な記事掲載を願う読者として、一言苦言をお伝えしないわけにはいきませんでした。日本を代表するメディアとして、公正で中立的な報道姿勢を失うことなく、品位と正確さ、また正義をもって紙面を構成していただきたくお願いするしだいです。

以上

添付資料一覧

- 1、第171国会「風車による健康被害と補助金交付認定に関する質問主意書」
- 2、「上記質問主意書に対する政府答弁」
- 3、第170国会「風力発電施設に関する質問主意書」
- 4、「上記質問主意書に対する政府答弁」
- 5、「風車騒音・低周波音による健康被害」
- 6、「低周波・超低周波騒音が生体に与える影響」
- 7、CEF 熱川ウインドファーム近隣一部住民健康被害症状
- 8、低周波・超低周波騒音による健康被害に関する医学研究論文5本

Mariana Alves Pereira ERISA, Lusofona University, Lisbon, Portugal

Nuno A.A. Castelo Branco Center for Human Performance, Alverca, Portugal

- ①Vibroacoustic disease: Biological effect of infrasound and low-frequency noise explained by mechanotransduction cellular signaling
- ② Public health and noise exposure: the importance of low frequency noise
- ③ Infrasound and low frequency noise dose responses: Contributions
- ④The scientific arguments against vibroacoustic disease
- ⑤In-Home Wind Turbine Noise Is Conducive to Vibroacoustic Disease

- 9、「風車の騒音と健康」 アマンダ・ハリリー(イギリス)